泉穂のいまどき恋愛講座……

私が初めて気に入ったお酒というと、カルアミルクだったと記憶している。あるいは、モスコミュールだったかもしれない。いずれにしても、ティーンエイジャーの女のコが、当時一世を風靡したあの『カフェバー』で、ボーイフレンドから、もしくは彼の友人であるバーテンダーから薦められて口にしてみるという設定にふさわしい一杯だった。

それは、18歳の私には、魔法の液体のように、口当たりが良く、いくらでも飲める気がしたものだ。それでも時間がたつと、少し頬が熱くなったり、気分が高揚して、たしかにそれがジュースではなかったことを教えてくれた。

多くの女のコたちがそうであるように、私も男たちからさまざまなカクテルを教えられた。ずっとビールが飲めず(今でも飲めない)、ウイスキーでひどく胃が荒れてしまう私は、リキュールしか受け付けなかったのだ。大抵は甘い香りと、フルーティーな味わいと、パステルカラーの色彩をしたカクテルたち。

多くは恋を促進するために使われたカクテルである。「あなたのこと、気に入ったみたい」を言葉にするために、アルコールは力を貸してくれた。もちろん、ほとんどの男のコたちだって、お酒を武器にしたことがあるはずだ。

まだ20歳になるかならないかの頃、ひどくお酒をのんで陽気になっている男のコから突然キスをされたことがあって、あの時はちょっと戸惑った。

彼は私の手を引いて、ダンスフロアから人のいないシートまで連れ出し、まったく言葉を放棄して、突然キスをしたのだった。ぶうんとアルコールの匂いが口の中に拡がった。

これはいったい何?

私の頭の中は疑問だらけだった。彼は翌日顔を合わしても、何も言わなかったし、忘れている風にさえ見えたのだから。

だけれど、私はすぐに答えを見つけた。

私は彼のことをちょっと気に入っていたけれど、本気で恋をしたいタイプの男のコではなかった。何とも微妙な位置に、彼はいたのだ。たぶん、彼にとっても、私はそういう位置にいる女のコだったのではないかと思う。

アルコールは時として、『ちょっと気になる』者同士に悪戯をしかけるものだと、私はその時知ったのだった。

それ以来、男性と二人だけでお酒を飲みに行くとしたら、完全なる男友達か、素敵なハプニングが起こっても良い未知の男性かのどちらかに二極分化されている。つまり、言いたいことを遠慮なく喋ってストレスを発散するか、二重の意味を持つ会話を楽しみながら誘惑するかされるかして、結局ベッドでストレスを発散するか、どっちにしても帰宅したあとはすっきりとしている、というわけ。

もちろん、ここ4年近く、後者の方の発散には出会えていない。今のダンナに出会って以来、そういうチャンスはないし、今さら、ダンナを誘惑してもおもしろくもおかしくもないからである。

さて、話をカクテルに戻すと、近頃、カクテルは卒業して、ひたすらジン、辺倒。あの甘い液体、パステルカラーの色彩は、『女のコ』の範疇を脱するにつれて、飽きてしまった。口の中に甘さが残って、どうもあと味が悪かったし、喉が渇いている時にはいっきに飲めない。

ビールが飲めない私は、ビールに代わる食前酒、あるいは夕方の一杯、というやつを探していて、ジンと巡り合い、すぐに虜になってしまったのだ。

あの独特の香り、夏の挑発的な太陽を思わせる香り。そして、女の胸を灼くような、ひりひりする味わい。ライムをぎゅうっと絞って、クラッシュアイスをたっぷり入れて、いっきに飲む。

ジンに男性的なイメージを感じる人もいるかもしれないけれど、私は絶対に、女の飲物だと思う。女のコを卒業した、女の。

男たちに贈り物をねだったり、高い声で喋ったり、彼の胸にぶらさがって歩くことなどをやめて、自分の足でしっかりと歩く背筋に伸びた女に。

あのひりひりとする味わいは、恋をした時、胸を焦がす感覚に非常によく似ている。すべてを表現してしまう、若い女のコの無鉄砲な恋ではなく、薄い皮膚の下に情熱を隠し持っているような恋の味に。

あのほろ苦さが心からおいしく感じられた時、女のコたちは、ある意味で、女になるのかもしれない。

マンボカーパラダイス

飲んだら乗るな!

お急ぎのところすみませんでぇーす、ここに向かって、はーってやってくれますか、は――って。はい、どうもありがとうございました。それじゃあ、気いーつけて。というのはあたりまえ。はい、クルマから降りてー。ちょっとこっち来てー、はいこっち、何してんだおまえ、さっさと降りろ。おまえ、まっすぐ歩けるかー。なんて言われると、とたんにまっすぐに歩けなくなる奴、いるでしょう。午前0時を回った頃、なぜかマイクロバスの中で童心にかえって風船を膨らませる奴、いるでしょう。

まあ、人生いろいろなことがあるわい、あーっはっはっはっ!では済まない話。だいたいカラオケやクラブに、クルマで行っておいて酒飲む奴は、なに考えてんだよ。飲むならタクシーに乗れ、タクシーに。こういう馬鹿者が最近また増えてきてるそうです。私が自動車会社でクルマのデザインをしていた頃、さすがというか各部署の掲示板にやたらとでかい筆文字で『交通ルールを守ろう』とか『お年寄りを事故から守ろう』などとまるで小学校の教室みたいにあっちこっちに標語が貼られたりしていました。加えて『昨日の交通事故速報』なるビラが毎朝の朝礼で読まれるという、それはそれは大変なところでした。プライベートな時間だろうがなんだろうが、たとえそ

MARUOKA IZUHO

【プロフィール】1965年生まれ。同志社女子大学卒、株電通プロックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に あふれた無邪気が罪になる(PHP研究所)、キスまで、待てない(大和書房)など。

HAP HAZARD REMARKS

着だおれ京都人に送る。

『ササイな情報』8

イラスト：佐藤アモール陽子

お酒の特集だということなので、バーの話題から始めよう。

今のオフィスが入っている大阪・アメリカ村のビルの2階に「活酒」という店がある。黒の格子戸に、長唄が流れるというオフィスビルのなかの異空間なのだが、このバーがオープンする夕刻7時頃になると、ビル全体にお香の匂いが漂ってくる。このバーの無口なマスターが演出するこの香りだけで、昼間は何の色気もないテナントビルが不思議な艶を発し出す。ワープロに向かっている自分が、無駄な夜を過ごしていると言わんばかりに、この香りは夜が深まるにつれ、濃くなっていく。百の能書きより、目に見えない一瞬の香りの方が欲望が刺激されるという事実を、改めて思い知らされる。

京都で育ったものとしては、夕方のあの打ち水に日本の匂いを感じていたいのが本音だけれど、日本人の香りに対する意識はこの数年で大きく変わってきたようだ。海外に出る日本人が増えたことも大きな理由だろうけれど、香水を上手く自分のキャラクターに生かしている女性は確かに増えている。女性だけでなく、男性もそう。以前はエレベーターや電車の隣に乗り合せた男性が、香水の匂いをまき散らしていたりすると即刻、嫌悪感を持ったものだが、最近は何となく許せてしまう。二日酔いの時に、雨の日の皮ジャンの匂いを嗅がされるより、香水の方がよっぽど良い。

5年ほど前、クリツィアのデザイナーのマリウチア・マンデリにインタビューした時、「セーム革のジャケットを発表するのに、まずその革の匂いを消すため、何シーズンも研究に費やした」と話していたけれど、デザインだけで語られることの多いモードの世界は、香りに敏感だ。京都服飾文化研究財団のキュレーターである深見冥子さんの著書「パリ・コレクション」(講談社現代新書)の中で、オートクチュールのメゾンの売上の65%以上が香水で占められているというデータが挙げられているが、デザイナーブランドと香りは密接に結び付いている。ジャン・パトウなどは「ジョイ」の香水でイメージが形成されている。ディオールにして「プワゾン」の香りが実際のコレクションより、イメージが強く残っているのではないだろうか。

パリで昨年春に発売され、大きな話題を呼んだ三宅一生の香水「ロードゥ・イッセイ」がいよいよ今秋から日本でも発売される。三角形のボトルからしてパリでの一生のイメージが伝わってくる。軽い香りと言われるが、残念ながら香水を嗅ぎ分ける力はないので、ヨーロッパのどんな女性が付けているのか、判別できなかった。しかしながら、一生のプリーツを着こなしている女性は日本でも多く見かけるようになったので、このロードゥ・イッセイとコーディネートしていただければ、我々男性にとって新しい記憶がインプットされそうだ。

日本人のデザイナーでは、ケンゾーも香水を発表しているが、こちらも決して強い香りじゃなくて、優しい。一生の香水を発売しているBPTという会社は資生堂のパリでの別会社だが、ゴルチエの香水も今春からヨーロッパで発表されている。こちらはマドンナをイメージしたボディ型のボトル。2年前に資生堂のから発売された「アンジェリーク」という香水は、ウォーホルがボトルをデザインしたという理由で探していた男の友達がいた位だから、今回のゴルチエの香水も、香りよりそのボトルデザインが男性に受けるかもしれない。ヨーロッパのお土産に誰かにねだってみては？

NODA TATSUYA

【プロフィール】1959年京都生まれ。流行通信社・WWDジャパン編集部デスク。東京中心のファッション情報のなかで、関西に留まり、10年以上にわたり世界の服飾産業を見続けている。91年より大阪コレクションの選考委員として、海外、新人のデザイナーのショーもサポート。

それが、もらい事故であっても、その上司の名前まで入ってしまうそのビラは交通事故抑止力充分、なんか中国の犯罪者が街の壁新聞に張り出されているような、そんな感じさえしました。話を元に戻しましょう。

学生の頃からお酒が好きで毎日ガンガン飲んでいた私も、自動車会社に入ってからというもの、極端に量が減りました。2日に1回は見物できた衝突実験も、見れば見るほど事故の恐ろしさを肌で感じるものでした。まあ酒断ち道場みたいなところとも言いましょうか。でもまわりの連中は、よくまあ飲む奴ばかりで、一晩に何件もハシゴしたりもしました。そこで登場するのが、代行車という優れものです。京都や、東京のように交通機関が発達している街では、あまりお目にかからないクルマですが、田舎に行くとタクシーよりもたくさん走っているのです。どういうものかというと、酒飲むと最初からわかっていても、クルマで出かけなければいけないほど不便なところでは、飲んだ後どうやって帰るかという問題が起こります。そういうとき、店から無線タクシーと同じ要領で、電話で代行車を呼びます。しばらくするとタクシーみたいに屋根の上に行灯のついた軽自動車がやってきます。これには2人乗ってきます。それで助手席に乗ってきた方が、家まで自分のクルマを運転してくれるというわけです。もちろんいっしょに家まで軽自動車もついてきます。これは便利です。実際使ってみると、タクシー並の料金。これからのクルマ社会の中で需要は増えることでしょう。とは言っても京都はそんな田舎じゃないですから飲んだら乗るな！は皆さん守りましょうね。

PARADISE YAMAMOTO

【プロフィール】元東京パノラママンボボーイズのリーダー。富士重工業デザインセンターで、カーデザイナーとしても活躍してきた。マンボ画伯ソリマチアキラとともに東京ラテンムードデラックスという粋なバンドを結成。年内に京都でも公演があるぞ！お楽しみに。